

喜んでもらう練習

介護施設で働くAさんは、利用者から「声を聞くと元気が出る。」と慕われる存在です。ある日、同僚が「Aさんは最初から前向きな人だつたんでしょう。」と声をかけました。するとAさんは、少し照れながら「そんなことはないですよ」と言い、昔の話を始めました。

高校時代、私は人と話すのが苦手で、家でも無口でした。進路に悩み、気持ちが沈む日々が続いていた頃、祖父の勧めで地域のボランティア活動に参加することになったのです。そこで最初に教えられたのは、「来た人には必ず目を見て挨拶しないさい。」と教えられました。初めは恥ずかしく、声も震えましたが、「これは人を喜ばせる練習だ。」と言われ、続けてみました。すると、相手の表情が和らぎ、自分の心も軽くなつていったのです。

やがて挨拶は自然なものとなり、人との関わりが苦ではなくなりました。Aさんは今も、その時に身につけた習慣を大切にしています。

今日の言靈 良い習慣は人を支える力になる。

人に関わる場面では、少しの勇気が求められる瞬間があります。声をかける、手を貸す、挨拶を返す。その一歩は小さく見えても、相手の安心や喜びにつながります。

そして不思議なことに、その反応を受け取ったとき、行動した側の心の方が深く満たされることがあります。学校現場でも同様で、何気ない配慮や親切は、子どもや同僚の表情を変え、空気を和らげます。その積み重ねが、人間関係の土台をつくり、働く意味ややりがいを支えていきます。教職員が日常の中で示す小さな行動は、周囲に影響を与えると同時に、自身の心の余裕や温かさを育てます。一度きりの大きな行為より、続けられる善意こそが、人を強くし、人生を豊かにしていくのです。その積み重ねは、やがて子どもたちの行動や価値観にも静かに受け継がれていくでしょう。



【今回の学び】⇒学校文化は、1つの信念・幸動から創造されていく！